



磨光

令和8年1月吉日
三豊市立本山小学校
No. 23
発行者：中田 祐二

令和6年4月。ひと月後の運動会に向けて関係者が集まっていました。「参観者が日差しをしのぐテントがない。何とかしたい。」という声に力を貸してくれたのが、体協役員をはじめとする地域の方々でした。コロナ禍から立ち直っていく地域の方とのつながりは、この「思いやりテント」から始まっていると思います。

思い返せば、今の6年生が入学してきたのは、新型コロナウィルスによる一斉休業の年でした。その後も、それまで実施していた地域との「夕涼み会」どころか、学校行事も自粛、学級内で友達と話すこともさせられられるような日々を過ごしてきました。ずっと我慢を強いられてきた6年生の最後に、これ以上ない閉校記念式典・「ふるさとの届け」を贈ることができました。ありがとうございました。

ああ本山の子ら集う～式典と「届け」への感謝を込めて～

豊中町合唱団「エンジョイ」と、肉もっこを作ってくださった三豊市食生活改善協議会の方からは、同好の士が集い、共通の目的のもと活動を続ける魅力を教えていただきました。式典明けの週初め、私から子どもたちに「みんなも、一生楽しめる何かを、これから長い人生で一つ、見つけてください。」と伝えました。

四ツ足の「獅子舞」。伝統を受け継ぐ心強さを感じたのは、獅子舞の演舞だけではなく、人となりを受け継いでいる中学生・高校生の姿でした。「ふるさとの届け」の後、運動場に出ていた長机を片付けようとしていたら「持ちます。」「代わります。」と声を掛けってくれました。

縁日屋台から、以前の「夕涼み会」を思い出しました。行事が自粛されて数年が経ち、当時を知る人も少なくなる中、PTAと地域の力を合わせて3つの屋台を開くことができました。屋台がもっている独特的な懐かしい風情は、閉校と銘打ったイベントにふさわしいものでした。

3台の「ちょうさ」が垂れ幕を付けて運動場に入ってきた時は感動的でした。秋祭りからひと月経ち、一度解体したちょうさを組み立てたところもあったでしょう。生半可な気持ちではできないことをしていただきました。ちょうさが本山小学校に入る時は、これが最初で最後。その最後に地域の方の心意気を見せていただきました。



12月のある日、6年生がタブレットパソコンを手に学校内を回っていました。タブレットで撮影していたのは「わたしの大切な風景」でした。ある子は校舎を。ある子は学校図書館を。ある子は、陸上後のひっそりとした教室を。



何気なく撮影した写真。そのありふれた風景が、時間が経つことで、ありふれていない深い感慨を呼び起こすことがあります。きっとこれらもその1枚です。

残り3ヶ月。自ずと子どもたちに「本山小学校が終わる寂しさ」が押し寄せ、6年生には「卒業」がひたひたと近づいてきます。目にする風景が、どれもセピア色に色づきそうな最後の3ヶ月です。